

松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】 島田めぐみ

【所属】(助成決定時)東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻国際関係論分野

【研究題目】

南インド農村における社会関係の変容

—マイクロファイナンス活動による社会関係の変化を事例として—

【研究の目的】

本研究の目的はマイクロファイナンスグループ(MFG)の活動がメンバーの既存の社会関係資本および社会関係をどのように変容させているのかを、Tamil Nadu 州の農村における調査を基に明らかにすることである。インドでは1990年代初頭から政府主導の新しいマイクロファイナンス・プログラムが導入され急速に拡大している。このプログラムでは、各グループの自主性が高く、グループ内部での資金運用および回収はグループの判断にまかされている。従ってプログラムに関わる金融機関や NGO にとってグループは「ブラックボックス的存在」であるといえる。マイクロファイナンスと社会関係資本に関する先行研究では、既存の信頼関係(社会関係資本)を活用した貯蓄・貸付方法が情報収集にかかるコストを削減することなど、既存の信頼関係が マイクロファイナンス活動を行う上で役立つという指摘がある。しかし、筆者の調査地では、カースト制度に基づいた既存の信頼関係がマイクロファイナンス活動においてむしろ弊害となっている事例がみられた。

【研究の内容・方法】

調査地は、南インド Tamil Nadu 州 Dindigul 県のK村である。同村は県の中心の町 Dindigulからバスで30分ほどのところにある、計5つのカースト成員が居住するミックス・カーストの村である。同村には同村で活動するNGO、政治家などが作った約25のマイクロファイナンスグループが存在する。このうち、調査対象はNGOが作った18のマイクロファイナンスグループである。筆者は同村付近の大学に滞在しながら、半構造化された聞き取り調査、フォーカス・グループ・ディスカッション、グループミーティングの観察、などの質的な手法を用いてデータを収集した。

収集したデータをもとに、異なるカーストの出身者からなるMFG(ミックスMFG)と同じカーストの出身者からなるMFG(シングルMFG)とを比較したところ、前者のほうが返済率がよい傾向にあるということが明らかになった。その原因は、Tamil語でVithukurtharと表現される行為にある。Vithukurtharとは日本語に直訳すれば「融通をきかせる」という意味である。シングルMFGでは、一つのグループに親族関係にある人々が含まれており、メンバーの誰かが返済期限を守ることができないという場合に、親族関係にある人々は返済を強要することができず、「融通をきかせ」返済猶予を認める。これが頻繁に行われるようになると返済率の悪化につながる。一方、ミックスMFGでは、一つのグループに親族関係にある人々が含まれていることはなく、誰かが返済期限を守ることができないという場合、1,2度は「融通をきかせる」ことがあっても、返済率の悪化につながるほどの返済猶予は認められない。例えば、あるメンバーが長く返済を怠った際には彼女を自宅から締め出す、という制裁が加えられた。結果として返済率は良好に保たれている。

【結論・考察】

本研究を通して、シングル MFG ではマイクロファイナンス活動における相互監視の原理が機能しない可能性があることが明らかになった。マイクロファイナンスグループという「ブラックボックス的存在」の内部で起こるこのような現象を説明するために、ウェーバーの概念であるゲマインシャフト関係(主観的な共属感情、感情価値を中心とする関係)とゲゼルシャフト関係(合理的に動機づけられた利益勘定、合理的協定にもとづく同意を中心とする関係)とを援用したい。一般的にマイクロファイナンスの研究では、ゲマインシャフト関係に基づいてグループを形成すれば、そこにある既存の信頼関係で相互監視の原理が働くと仮定されている。しかし、現実のマイクロファイナンス活動はゲゼルシャフト関係を必要とし、ゲマインシャフト関係に基づいたマイクロファイナンスグループでは相互監視の原理は機能しないことがある。マイクロファイナンス活動における相互監視原理が機能するためには、ゲマインシャフト関係をゲゼルシャフト関係に変容する必要があるのではないだろうか。